

文化

来年への齋籠と捉えよう

長期戦の様相を呈する新型コロナウイルスと人類との戦い。日本における感染拡大の予防戦略が「3密」の回避。その「密」を避けることができない重要な行事に「祭」がある。令和2年の祭はどうなるのか。

我が国を代表する夏祭である祇園祭(京都市)と天神祭(大阪市)が「規模の大幅な縮小」を決定。祇園祭では山鉦巡行、天神祭では催太鼓・地車・獅子舞といった、ヒトが主体となる娯楽的性格の「神賑行事」が中止となる。また、両祭とも、カミを奉る「神事」の内ではあるが神輿渡御も行われない。これらの行事では担い手と見物人の双方に極めて濃度の高い「密」が発生するからだ。ただし、これを以て祭全体が中止になったわけではない。神職や氏子の代表者ら少数で祭の核心にあたる「重要な神事」は行われる。その限りに際して祭が中断したことはない。この点の理

コロナで自粛 今年の祭

篠笛奏者 森田玲

もりた・あきら 玲月流初代・篠笛奏者。昭和51年、大阪府生まれ。京都大学農学部卒業。文化庁芸術祭新人賞受賞。京都市芸術文化特別奨励者。主な著書に「日本の祭と神賑」(創元社)など。京都市在住。

解と周知は大切である。これまでも、凶作や不漁、コレラ流行、自然災害、戦争など日常生活がままならない時には、「神賑行事を自粛しつつ神事は行う」という柔軟性を発揮して祭は継続されてきた。

撰河泉、瀬戸内域に広がる「だんじり文化圏」(太鼓台・地車)でも中止・縮小・日延が相次いでいる。淡路島(兵庫県)で盛んな春祭(2~5月)や、大坂城下や中津城下(大分県)など都市の夏祭(7月)は軒並み影響を受けた。秋には放生会が起源の八幡神系の祭(9月)と収穫感謝祭(10~11月)が控えているが、既に神賑行事の自粛を決定した祭もある。9月の岸和田祭(大阪府)も町ごとに判断が開始されている。



昨年7月の天神祭本宮。地車講の三ツ屋根地車がにぎわいを演出した。大阪府北区の大阪天満宮

毎年、必ずやってきた祭。今年はその本義を問わずにはいられない。祭とは何か。「個人と共同体の活力の更新」が祭の社会的な役割と言える。そこでは、人々が集い、カミを奉り、祈りや感謝を述べるとともに、楽しみと喜びを分かち合う。とりわけ、老若男女総出の賑やかな神賑行事は、祭の大きな原動力となっている。今年、感染拡大防止の観点から、治療薬やワクチンがない状態での神賑は難しそうだ。また、寄付集め

もままならない。担い手の中には、収入の減少や失業などで精神的・経済的にまいっている人も少なくない。秋季以降も、日本各地の祭の多く、特に神賑行事の自粛が予想される。地元の人々の落胆は察するに余りあるが、このような状況下にあっても前向きに検討できることはある。

「祭は誰のものか」と問うてみる。もちろん、産土の神を中心に集う氏子・崇敬者のためのものである。ただし、そこには、現在だけでなく、過去、そして未来の人々も含まれる。この世代を超えた繋がりを感じる時、祭の「来し方行く末」が見えてくる。

未知の病を前にして「我々の祭」は無力なのか。否、「来年こそは必ず祭を行う」という人々の強い気持ちは、通常の経済政策とは異なる次元で強い期待感と推進力を以て、日常生活・社会活動を好転させるきっかけとなり得る。そのためにも、今は、耐える時であると私は考える。

古来、人々は祭を迎えるにあたって、心を鎮め身を清めた。これを齋籠と言った。今年の祭は、来年の祭に向けての少し長めの「齋籠祭」であると、肯定的に捉えた。「新しい祭様式」ではなく「いつもの祭」を取り戻すためにできることは何なのか。今年ほど、祭と真剣に向き合わねばならない年はない。(寄稿)